

## 分岐点にたつ「教養」的翻訳叢書——小学館「少年少女世界の名作文学」の意味——

佐藤 宗子

千葉大学・教育学部

“World Literature for Children” at a Turning Point: The Educational Aims of Shogakukan’s *Shonen-Shojo Sekai no Meisaku-Bungaku*

SATO Motoko

Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九六四年から刊行が開始された小学館「少年少女世界の名作文学」は、先行して一九五〇年代に刊行された創元社と講談社の二つの「地域割り」叢書の形式を受け継ぐ形式をとるものであった。しかし、先行二叢書とは内容と外観の双方で、かなり異なる様相となっている。そこで「地域割り」の巻数の割り当て方、収録作品の傾向、訳出の方法等の特徴を検証し、その後、とくに本体にはめ込まれた表紙絵に焦点化しながら、視覚的情報の盛り込まれ方にも目を向けた。その中で、一般文学からの作品収録が多い半面、いわゆる「和文和訳」の方式が多用されることがもたらす弊害が生じていること、表紙を飾るカラーの泰西画群が形成する別種の「教養」が想定されていることなどを明らかにした。また、こうした形態の叢書の出現が、経済成長を背景にして、児童文学が産業として発展していく中で見られる点にも着目した。

キーワード：児童文学 (Children’s literature) 翻訳 (translation) 少年少女 (boys and girls) 教養 (cultural education) 叢書 (series)

## 一

一九五〇年代に刊行された、創元社と講談社の二つのいわば「地域割り」の少年少女向け翻訳叢書が、「教養形成」の役割を果たすべきものとして考えられていたことについては、この数年の追究で明らかになってきた。(詳しくは『千葉大学教育学部研究紀要』第五七巻～五八巻所収の小論を参照されたい。)その際に、創元社版と講談社版では、「教養」の捉えられ方そのものに差異があることも判明した。

ところで、一九六〇年代以降における少年少女向け翻訳叢書では、この「地域割り」方式を受け継いでいくのが、小学館刊行の叢書になる。一九六四年から刊行開始となる「少年少女世界の名作文学」を皮切りに、六八年からの「カラー版名作全集 少年少女世界の文学」、七一年からの「ワイドカラー版 少年少女世界の名作」

と続く。講談社と並び、児童文学出版の大手である小学館が、先行する叢書の独自の方式をどのようなかたちで取り入れたのか、その際に「教養形成」の側面はどのようにに継承されたのか、されなかったのか。それは、一九六〇年代の児童文学状況といかにかかわりを持つのか。こうした問題意識のもとに、まずは、小学館版「地域割り」の嚆矢となった「少年少女世界の名作文学」に焦点を絞り、内容と造本の双方に目を向けて、検討を進めることとしたい。

## 二

## (一)

一九五〇年代には、創元社「世界少年少女文学全集」(五三年刊行開始)と講談社「少年少女世界文学全集」(五八年刊行開始)の二つの「地域割り」叢書が刊行

され、いずれも児童文学出版上、大きな意義があるものと認められている。前者は企画そのものの独自性、後者はその普及度の高さなどの点に拠る。しかし、それによって他の出版社からの翻訳叢書が「地域割り」一辺倒に傾いたかといえば、そういうわけではない。今回の検討対象である小学館「少年少女世界の名作文学」に先立ち、あるいはほぼ同時期に刊行された少年少女向け翻訳叢書の構成がどのようなものであったかを、偕成社と河出書房、そして先行する小学館の叢書を順次取り上げて確認しておくことにしよう。

まずは、一九五九年から六一年にかけての偕成社「児童世界文学全集」である。はじめ二二巻、途中から二五巻にふくらんだこの叢書は、「地域割り」とは無縁である。第一、第二巻を「世界童話名作集」「日本童話名作集」の対で始める叢書構成は、その後の中盤、終盤にも「○○むかし話集」「○○神話物語集」と、世界と日本の対を組み入れる。その間には、イソップ、アンデルセン、グリムの「童話集」を並べることもする。その他は基本的に、「家なき子」などは一点で、「小公子」「アングル・トムの小屋」は二点で一冊を成すような作品主体の構成となっている。作品の配列は、概していえば米、英、独、仏、伊、東洋の順で、この点では創元社版以来の地域順との関連も考えられる。しかし、前述のように、冒頭はじめ三か所の「世界・日本」の対と、途中の「イソップ童話集」等の三冊配置により、そうした言語圏の順番意識はかなり薄らいでいるようにみえる。

次に、少し遅れて一九六六年刊行開始（翌年完結）の河出書房「カラー版 少年少女世界の文学」二四巻＋別巻二巻をみてみよう。こちらは、第二巻の「聖書物語」などわずかの例外を除いて、基本的には一巻に二～三作品を収録する方式で、各巻の題名もそれらの列挙となっている。全体の配列は、古典、英、米、仏、独、ソ連、北欧、南欧、それから別巻のシートン「動物記」とフェアブル「昆虫記」となる。こちらはまさに、「地域割り」配列といつてよい。

それでは、小学館で先行する叢書、「少年少女世界名作文学全集」ではどうだったのか。少し小ぶりで基本的には一冊一作品収録を旨とするこの叢書は、初めにシルバー版二八巻が一九六〇年から刊行開始となり、その後六二年から続けてゴールド版が同じ巻数（二九巻から五六巻まで）を六五年にかけて刊行した。シルバー版、ゴールド版の両方の配列を見てみると、基本的に、(古典)、英、米、(独、仏)、(ソ連)、北欧、南欧、東洋、日本、(アンソロジー)といった流れで構成されてい

ることが分かる（丸カッコは片方のみにあり、山カギカッコは順番が逆転）。つまり、この段階で小学館でもすでに、作品優位の収録であるにせよ、創元社、講談社と続いた「地域割り」を念頭に置いた叢書構成がなされていたことがわかる。

こうしてみると、創元社が切りひらき、講談社が受け継いだ「地域割り」の発想が、自然に各社の叢書構成に取り入れられていった様子がよくうかがえる。時代と地域の順を含め、「世界」の「文学」を概観する際にはそれが順当なものという認識が、各社の企画に関わる文学者、編集者に共有されたと考えてよからう。

その流れの中で、あらためて「地域割り」を掲げる叢書を刊行するというのは、それだけ、先行二叢書との差異化も図る必要があるものであつたはずである。講談社版の最終巻刊行が六二年一〇月、そして小学館の「少年少女世界の名作文学」の刊行開始は六四年九月。時期からいって、遅くとも講談社版の完結後の時期には、小学館版の企画は始まっていたと考えられる。どのように新たな特徴が付されたといったのか、次に検討していこう。

(二)  
小学館「少年少女世界の名作文学」は、監修者、編集委員にそれぞれ著名な文学者たちが多く名を連ねる。

監修者 川端康成、中野好夫、浜田廣介

編集委員 石川 湧、岩崎純孝、植田敏郎、魚返善雄、阪本一郎、関 英雄、奈 街三郎、滑川道夫、福井研介、村岡花子、山室 静、彌吉光長

各国文学の専門家を揃えるほか、日本の児童文学者、国語教育の専門家を擁する体制である。もともと、他社の同種企画にも名を連ねるような著名人たちが、実際にどの程度、作品選定作業に関わったのかには疑問も抱く。むしろ、各巻の「解説」を担当するような関係者の中に、実際を取り切った者もいたのではないかと、とも考えられる。たとえば、イギリス編で一卷、アメリカ編で二巻の「解説」を担当し収録作品の翻訳にも携わっている白木茂などは、目次等に名前が見える部分以上に深く、関わっていたのではないだろうか。

五〇巻を全体的に概観した一覧は、本稿の末尾に掲載しておく。その一覧からもわかるように、五〇巻の「地域割り」のしかたは、まさに先行する二叢書に準じていることがよくわかる。古典編二巻、イギリス編七巻、アメリカ編九巻、フランス編八巻、ドイツ編六巻、ソビエト編五巻、北欧編二巻、南欧編二巻、東洋編三巻、

日本編五巻、そして伝承文学のアンソロジー一巻という構成は、地域の分け方と並べ方という点で、すでにこの配列の流れ方が定着したものだという印象を与える。

それと同時に、すぐに気付く差異もある。アメリカ、フランス、そしてイギリス編の巻数が前二叢書に比して多く、北欧、南欧、東洋の比率が低い、という点である。これは後に述べるような収録作品の選定基準や翻訳・再話のしかたとも大きく関わる点である。おそらくは、六〇年代に入り、新しい作品を翻訳するには翻訳権の取得の必要、当該言語の専門家による訳出、完訳が基本になりつつある情勢といった背景が影響しているのは間違いない。そうした数々の困難を回避しやすい方法として、英語圏の作品重視や少し古い時代の一般文学の選択が図られた。そうとすれば、巻数の多い地域が英米とフランスであることも、うなずける。他方、「世界」全体を見渡すという、そもそもの「地域割り」の発想自体は弱まっていることも、あわせて指摘しておくべきだろう。

なお、日本編については、古典作品が極めて広範囲に選ばれていること、近代以降の作品において、「次郎物語（第一部）」と「路傍の石」の長編二編で一巻をなすような収録がなされていることには目を向けておきたい。

さて、すでに「地域割り」の説明でも若干ふれたが、注目すべきは作品選定のされ方が、創元社版や講談社版とは大きく異なる点だろう。何よりも、一巻当たりの収録作品数が多い。そして、一般文学の作品紹介を多く含む。地域ごとに、詩作品の収録もされている。また、推理小説やSFなど、読物的な作品も、おそらく意識的に収録されている。

具体的に、いくつかの巻に触れながら確認してみよう。

まず、収録作品数が少ない巻では三、四作程度だが、多い巻では、七、九作程度となっている。たとえば、第二〇巻「フランス編二」の場合、収録されているのは「三銃士」「ああ無情」「ペロロ童話」と、最も少ない作品数である。第一四巻「アメリカ編五」では、「小公子」「小公女」「秘密の花園」「ワンダーブック」の四作。この場合、同一の巻にバーネットの作品が三作も収録されている点にも、目を留めておきたい。ほかに第一二巻「アメリカ編三」でも、「トム・ソーヤーの冒険」「王子とこじき」「はねがえる」「リーマスおじさん」と、やはりマーク・トウェインの作品が三作採られている。こうした特定の作家の重用が、アメリカ編の巻数増加の一因とも考えられる。

他方、第二二巻「フランス編三」では、「巖窟王」「学問のあるろばの話」「いなか医者」「あら皮」「モーパッサン短編」「ミュッセ詩」「リラダン短編」「風車小屋だより」「月曜物語」と、目次の見出しでは九作品の扱いとなる。この場合、詩や短編を収録しているから見出しが多くなる面もある。そのみならず、次節で触れるように、あの大長編「巖窟王」が、どの程度短くならざるを得ないかは、こうした収録状況からも想像がつくだろう。第三三巻「ソビエト編一」なども、「隊長プーリバ」「外とう」「せむしの小馬」「ルスランとリュドミラ」「スピードの女王」「キリストのヨルカに召された少年」「孤児ネリリ」と、少年少女向けの叢書収録が珍しい作品が多く、また何とも窮屈なほどの目次の詰め方である。

詩についてみると、イギリス編ではマザー・グースのほかに、ブレイク、バイロン、ワーズワース、アメリカ編ではホイットマン、フランス編ではラマルチーヌ、ミュッセ、ボードレール、ベルレーヌ、そしてアルベール・サマンとアルチュール・ランボーとフランシス・ジャム、ドイツ編ではハイネ、メーリケ、ソビエト編ではチュッチェフ、エセーニンと、かなり多くの詩人が起用されており、これが少年少女向けの選定なのかと少し驚かされるほどである。おそらく、こうした詩作品を収録した理由としては、一般文学を尊重していることの表明という見方もできるだろう。ただ同時に、詩であれば、仮に複数作品を収録するとしてもさほどページはとらない。その意味で、それぞれの巻のページ調整としての機能も果たしたのではないかと考えられる。

読物的作品については、他の叢書等でも、「ホームズ」や「ルパン」といった少年少女期に接することの多い作品の収録はしばしば見受けられる。しかし、本叢書では、「透明人間」「快傑ゾロ」「ルコック探偵」「黄色のへや」、あるいは日本編でも小酒井不木「少年科学探偵」を掲載するなど、かなり意欲的に通例と異なる作品収録をしている傾向が窺える。もともと、全般にかなり短縮された収録のされ方ではあるのだが、ともあれ、こうした分野にも幅広く目配りをし、少年少女に手渡すべきものとして捉えているという意図は伝わる。

さて、こうした収録状況をみればすぐに予想される通り、次に目につくのは、どのような翻訳の方法がとられているのか、という点である。これについては次に、検討していくことにする。

(三)

「地域割り」であれ作品主体であれ、児童文学の翻訳叢書の場合、「完訳」が原則となりにくいことはままたまある。古典の作品や、一般文学でも児童向けとして本国でも親しまれている作品（「ガリバー旅行記」など）を、名作叢書は多く収録しがちであるためである。なかには「岩波少年少女文学全集」のように、収録作品が新しい作品中心であって、いわゆる「名作全集」と異なることもあり、完訳が基本となっている叢書もないわけではないが、そのような叢書のほうが例外といつてよい。それでも、たとえば一九五〇年代半ばの創元社版は、意識的に初訳や完訳を入れるなど、当時としては画期的な業績を残した。

それに比べると、小学館「少年少女世界の名作文学」は、全体として、「少年少女向けに文章をあらためる」ことを徹底する方針を貫いたもの、といえるだろう。ただし、これは、必ずしも肯定的な評価として述べているわけではない。

本叢書の翻訳の特徴は、一つには、原作が児童文学である作品は比較的長いまま、一般文学である作品はかなり短くなって、収録されている点である。つまり、もともと児童文学である作品は、原作の展開や味わいをそのままに読者に手渡すことができるものと捉えられているのに対し、一般文学の作品は、短編はともあれ、長編であればあるほど、どのような概要であるかを大まかに紹介することが重要である、と考えられているように見受けられる。

一卷の中の配列でいうと、概して児童文学の作品は冒頭ないし前半におかれることが多い。一般文学からの採録として注目させたいような作品は末尾に置かれることが多い。もともと、児童文学作品の収録が多いイギリス編と、一般文学からの収録が多いフランス編、また古典が比較的多く収録されている巻と、近代以降、とくに現代に近い時期の作品が収録されている巻でも状況は異なっている。

ともあれ、そのように収録されている作品は、古典などを除き、翻訳方法については以下の四つのいずれかで示されている。

- 1 ○○原作 □□文
- 2 ○○原作 △△訳・文
- 3 ○○原作 △△訳 □□文
- 4 (詩の場合) △△訳

詩の場合は、そもそも目次の見出しに「○○詩」と詩人名が書かれているので、

4のようなスタイルの記載となるのだろう。さすがに詩の翻訳で、「文」とは書けないものらしい。

一方、1〜3については、第二二巻「フランス編四」のように、児童文学作品である「家なき子」や「家なき娘」でも「マロ原作／山内義雄訳 西山敏夫文」「マロ原作／津田穰訳 おのちゆうこう文」と3の形式をとることもあるし、同巻の「ルック探偵」などは「ガポリオ原作／梶竜雄訳・文」と2の形式をとることもある。1の形式は、たとえば第二六巻「フランス編八」の「モリエール短編集」や「シラノドールベルジュラック」などがそれに当たる。「モリエール原作／后藤有一文」や「ロスタン原作／村松千代文」とあるが、いくらなんでも、いきなりフランス語の原文から直接、子ども向けに再話することはあるまい。つまり、本来は何かの翻訳を参照しているはずだが、それを明示しない——ということなのだろう。3の形式をとる場合の「訳者」は、自分の訳出がそのままではなくて子ども向けの文章に「改変」されることを了承した人、ということではないだろうか。

3の形式は、俗に「和文和訳」と称され、児童文学におけるいわば「ずさんな翻訳」の格好の例として、良心的な児童文学の普及にとめる戦後の読書運動の流れの中では、初めから「翻訳」作品として認められることがなく過ぎてきた。しかしながら、大手の小学館刊行である本叢書などは、実際に書籍が流通する現場を考えると、当然ながら相当の普及力、そして影響力を持ったはずである。その意味で、「和文和訳」の実態解明は、日本の児童文学史の中でやはり見過ごすことのできない問題である点を指摘しておきたい。

なお、それらの訳出作品がどのように手渡されようとしていたかという点では、「読書のでびき」や各言語圏最終巻収録の「○○文学の歩み」も関係があるだろう。本叢書の「読書のでびき」は、かつての講談社版が十名弱程度の国語教育の現場にいる教師が手を替え品を替え、きわめて技術的な「読解」のしかたを教授して見せたのとは、少し異なる。いうなれば「解説」をもう少し砕いたかたちでの、作品理解のための解説的な文章、といった態である。そもそも担当しているのも、全五〇巻のうち九割近くにあたる四四巻を滑川道夫と関英雄が分け持っている（滑川二二巻、関二二巻）。残りは森久保仙太郎が六巻、柳内達雄が一巻のみを担当している。おそらくは、作品紹介的な側面も強い一般文学も多数収録されている本叢書であるがゆえに、国語教育的な丁寧な読解を収録作品全体に行うことは困難であり、

そのため編集委員でもある滑川・関の二名が中心になって、全般的な読み方の方向性を示すことにしたのではないか。

また、「〇〇文学の歩み」として、言語圏・地域ごとに文学史を掲載しているのは、補助的な「教養」の意図がこめられていると考えられる。たとえば第九卷「イギリス編七」には「少年少女のためのイギリス文学の歩み」が白木茂執筆で二四ページにわたり掲載され、その後ろには見開きの「イギリス文学年表」も載っている。

一卷が五〇〇ページ弱の大部の叢書とはいえ、「文学の歩み」にこれだけのページを割くということは、やはり、単に一編ずつを読むだけではなく、総体としての「〇〇文学」を把握してほしいという意識が感じられるのである。もっとも、当該地域の収録作品のすべてを読むことと、「〇〇文学の歩み」の内容が、うまく調和しているかどうかはまた別の問題ではあるだろうが。

「解説」「読書のでびき」、そして「〇〇文学の歩み」といった附属部分が補助的な役割を果たすにせよ、やはり肝腎の作品の提示自体が、「和文和訳」的な文章中心ということになると、そこから「教養形成」に資する何かを享受することが可能であるのか、疑問を抱かずにはいられない。

### 三

収録作品群にかわり、本叢書でもっとも「教養」的な匂いを放っているのは、おそらくは本体にはめ込まれたカラーの表紙絵ではあるまいか。そして、本体を包むカバーの、さまざまなカラー写真なども、少年少女読者の興味を引いたことだろう。本叢書は、先行の二叢書とは異なり、そのような視覚的情報がさまざまに取り込まれている。

収録作品名がずらっと書き並べられた函から本を取り出すと、まず眼に入るのは、その地域に係るカラー写真が何枚も並べられた本体カバーである。見知らぬ外国への関心を高めるようなそのカバーを手に見返しを開けば、本体見返しには古代の貨幣が薄く印刷されるなど、エキゾチックな雰囲気さがさりげなく演出されている。

一方、カバー後ろ見返しには、読書や青春期、あるいは人生に関わるような偉人（一―二人）の名言が載せられている。たとえば、第一回配本にあたる第一四巻「アメリカ編五」の場合は、次のような文章である。

\*科学では、もっとも新しい著作を選んで読みたまえ。文学では、もっとも古い

ものを読みたまえ。古典の文学はたえず新しいものなのだ。

バルアー・リットン

\*読む価値のある書物は、買う価値がある。

ジョン・ラスキン

「アメリカ編」にイギリス人の名言がつけられているように、さすがにそこまでは地域にあわせた選定はされていない。第一巻「アメリカ編二」には三浦梅園、第三二巻「ドイツ編六」には吉田兼好のことが選ばれているくらいである。

それはさておき、右の文章は、いずれも本叢書の作られ方を考えるなら、何とも意味深長に思えてくる。たしかに、読むたびに新しい発見ができるような作品こそ、古典であろう。そうした読む価値のある作品が収録されているのなら、大部でそれなりの値段がつけられていたとしても、もっともなことといえる。しかし、この叢書自体は、どうなのか。収録されている作品の原作自体は、その言語圏・地域の「文学の歩み」に照らして一定の評価を得られるものであったにせよ、それがかなり短縮化され、日本の少年少女に向けた「文」として翻訳・再話された時点で、相変わらず「読む価値のある書物」であり続けているとは、およそ言えまい。読書に目覚めた少年少女がこの箴言を先に眼にしてからページを開いたなら、「カバー」と〈本体〉の間に存在する大きな落差に、何よりも気づかされたのではないか。だが、そんな読者も、目を眩らされたことと想像されるのは、カバーを外して本体を手にした時である。先にあげた第一回配本を例にとれば、そこには、ページを基調にした本体の表紙外枠をあたかも額縁のようにみなして、真ん中に、ベラスケス「王女マルガリータ・マリアの肖像」がカラー印刷ではめ込まれ、画中の少女がこちらを向いているのだから。読者は、まるで画集の一ページを開いたかのように、品のある趣の絵画を鑑賞することかできるのである。

実は、各巻末尾には、「解説」と「読書のでびき」の間に、「表紙絵解説」のページが必ず見開きで、設けられている。五〇巻を通して、東京芸術大学で教鞭を執っていた伊藤廉が、掲載する美術品の選定と解説を担当していた。選ばれるのは、基本的には絵画だが、以下に示す巻では、それ以外の美術品が選ばれている。

第二巻「古典編二」：シャルトル本寺のステンドグラス

第三四巻「ソビエト編二」：ラベンナの聖ビクターレ寺のモザイク

第四二巻「東洋編一」：イランのミニアチュール

第四三巻「東洋編二」：水楽宮壁画

## 第四五巻「日本編一」：薬師寺の吉祥天像

なお、これらの記載からすると、それぞれの地域に関連のある美術品が選ばれているかと思いがちだが、必ずしもそうではない。たしかに、東洋編と日本編は、その地域を意識して作品を選んでいる。右記以外でも選ばれているのは、東洋編では徽宗皇帝「桃鳩図」、日本編では「平治物語絵巻」、安藤広重「大はしあたけの夕立」、岸田劉生「麗子像」、横山大観「無我」という具合である。だが、それ以外の区分については、画家の国や地域などは全く考慮されていない。だから、イギリス編にレンブラント「テイトウスの肖像」が、先にあげたようにアメリカ編にベラスケスが、フランス編にレオナルド・ダ・ビンチの「モナ・リザ」が、ドイツ編にポツチィチェルリの「聖母子と小さいヨハネ」が、ソビエト編にピカソ「大ぐらいの子」が、掲載されている。つまり、「東洋」と「日本」は、明らかに異質だが、他の欧米諸地域については、表紙を飾る絵画の選定にとつて、とくに「国境」を設ける必要はない、と伊藤藤は判断していたことになる。

念のため、西洋の画家たちの名前のみ、第一巻から列挙しておくことにしよう。

ミケランジェロ、ワトー、レンブラント、不明「若い王女の肖像」、セザンヌ、フラゴナール、ゲインズバロ、シャルダン、モネ、ドガ、ユトリロ、スーラ、ベラスケス、ゴヤ、ブラック、ピサロ、カンディンスキー、ダビッド、マネ、カミユ・コロー、ルノワール、レオナルド・ダ・ビンチ、ポール・ゴーガン、ドラクロア、ミレー、ルーベンス、ホルバイン、ポツチィチェルリ、デュラー、ロイスタール、アンリ・ルッソー、シャガール、シニャック、ピカソ、ブリウゲル、ゴッホ、バン・ダイク、ラファエロ、エル・グレコ、ジェリコー

「文学」以上に「美術」において、広範な地域をまとめた「西洋」と、「東洋」、「日本」は区別されるべきものであった。そして、「東洋編」「日本編」を合わせた八巻を除く四二巻の表紙を飾る四二点の美術作品は、まさに「西洋」的な「教養」を培うにふさわしいものとして、いわば画集を叢書全体に散らばらせた形態で、少年少女読者に手渡されたわけである。

この「少年少女世界の名作文学」の函に巻かれていた帯が、大阪府立中央図書館国際児童文学館に所蔵されているものには残されていた。それによれば、キャッチフレーズの「家庭の名作図書館」を解説するように、「内容も外観もこれぞ名作の決定版／勉強べやと、茶の間を飾る、豪華保存版／あなたの家庭の誇り 世界名作

の宝庫」と高らかに謳いあげている。「内容」と「外観」——たしかに、「外観」はまことに素晴らしい。管見の限りで、戦後に刊行されたさまざまな叢書類の中でも屈指、といえる。その反面、「内容」については同意しかねる。この点に関して、節をあらためて考え、本叢書の位置づけをしてみることにしたい。

## 四

いわゆる「和文和訳」の再話についての検証は、実際のところ、児童文学研究の中であまり取り上げられてこなかった。一つには、文学性の点からみれば、初めから「作品として、論外である」という低評価を与えられていたためであろう。一九六〇年代あたりから高まる「完訳主義」の風潮の中で、児童文学界の内部では、それは自明の判断とされた。二つには、その一方でこうした形態の翻訳叢書が刊行される背景にある、翻訳権をめぐる出版社が抱える問題や、児童文学者たちの経済的な問題などは、うすうす分かっていながら、問題として真正面から向き合うことを避けてきた経緯があるだろう。

前者に関して言えば、私自身はすでに一九八〇年代に、たまたまこの叢書収録の作品にも触れて、再話の問題を論じたことがある。「再話の倫理と論理」(『日本児童文学』一九八一年六月号所収)という論で、後に『家なき子』の旅(平凡社、一九八七)のなかに「Ⅲ フィリップ作品の半世紀——再話の倫理と論理——」として収めた。そこで取り上げたのは第二三巻「フランス編五」収載の「フィリップ短編」(ルイ・フィリップ原作／淀野隆三訳 きりぶちあきら文)二編であったが、「和文和訳」の過程で不必要な改変が行われていることを指摘した。したがって、確かに最初から低評価ときめつけがちになることも、よく理解できる。また、二〇一二年七月二二日に日本イギリス児童文学会西日本支部講演会において行った講演の際、聴衆の一人からは、少女期に家庭で定期購読していたこの叢書の文章になじめなかった体験が語られた。つまり、読書の習慣をめざして購読し始めた叢書により、逆に「読書嫌い」を生んでしまうかもしれない恐れがある、というわけである。他方、これも個人的な読書経験からではあるが、必ずしも否定的に捉えるだけではない面があることも事実である。というのも、中学生の時期に、この叢書が全巻完結後にセットとして、学校図書館に配架され、そのうち数冊を読んだ記憶がある。たとえば第二四巻「フランス編六」もその一冊だが、すでに他の翻訳や再話で親し

んでいた「ルパン」ものは、まったく面白く読むことができなかつたのに対し、「狭き門」は、相当地に短縮されていながら、読後にかなり強い印象を受けたことを記憶している。他にも、第五巻「イギリス編三」所収の「ボンベイ最後の日」などは、その題名とともに、確実に「読んだ」記憶が残っている。つまり、もともと一般文学として厚みを持つ作品は、相当地に圧縮され「和文和訳」されたとしてもなお、一定の強い読後感を与えうる力を持つ、ということである。その意味では、こうした一般文学の作品を多数収録すること自体の意義は、保たれたとも考えられる。

そうした個別の検証は今後に委ねるとして、現段階としては、翻訳・再話の全体方針が、先行する二叢書とは異なる、問題をはらむものとなった点を批判的に捉えておく。

後者については、そもそも「文学性、教育性、経済性」が絡み合う中で、児童文学の翻訳・再話がなされるという根本を改めて想起する必要があるだろう。右のような「和文和訳」が生ずるのは、多数の児童文学者が自身の創作一本で立っている状況が困難な中で、いわば当座の請負仕事として、それが重宝されてしまうという事情があつたと考えられる。一九五九年を「現代児童文学」出版の年とみなすこととともに、その後の経済成長に伴う児童文学の発展期が、そのまま「商品化」の時代になっていったことも、現在、児童文学批評においては共通認識といつてよい。そしてそれは、単に創作の分野のみならず、こうした翻訳の分野においても顕著にみられる現象だつたことがわかる。

反面、その「経済性」は他方では、従来の叢書ではみられないような、豪華さを演出することにもなつた。「和文和訳」の登場する内容と、印刷技術の進歩による美しい造本は、別々の事実としてあるのではなく、児童文学がおかれたまさに同じ状況の中で、現れた現象なのである。

小学館「少年少女世界の名作文学」は、「教養」形成の流れを受けて出現した「地域割り」叢書であることに間違いはない。しかし、その時の「教養」とは、〈見やすく、かみくだかれた「教養」〉であつた——というのが、端的な特徴といえるだろう。

先に名を挙げた一九六六年刊行開始の河出書房版は、「カラー版 少年少女世界の文学」という叢書名であつた。また、小学館でこの後刊行されるのは、六八年から「カラー版名作全集 少年少女世界の文学」、七一年から「ワイドカラー版

少年少女世界の名作」である。いずれも叢書名に「カラー」を謳っている点に眼が留まる。本叢書では本体の中の挿絵はまだモノクロであるが、この後の叢書はいずれも、内部の挿絵のカラー化を図っていく。それは、高度経済成長のもとにおける叢書の需要がどのようなものに移り変わっていったかを、暗に物語つてもいよう。収録作品の傾向や「和文和訳」の実態、表紙絵の傾向と特徴、カバー見返しの名言にうかがえる思想、地域バランスのあり方、日本編の内容検討など、本叢書に関してさらに追究すべき点はまだまださまざまに残されている。本稿では、「教養」形成の期待を担わされた「地域割り」叢書のあり方を振り返る時、「少年少女世界の名作文学」は、分岐点にたつものであつた——それをまずは確認したところで、今回の検証を締めくくることにする。

※ 本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「戦後の少年少女向け翻訳叢書にみる「西洋」と「東洋」——教養形成の追究」(課題番号235220418、平成二三年度～二六年度)の研究成果の一部をまとめたものである。

※ 本稿の骨子は、平成二四年七月二一日(土)に日本イギリス児童文学会西日本支部講演会(於・大学コンソーシアム大阪)で行った講演「世界」の受け止め方と受け入れ方——戦後の翻訳叢書と少年少女の「教養」形成——のなかで発表した。

※ 前巻(六〇巻)掲載の小稿末尾に記載した日にちの訂正

内容の骨子を發表した日本児童文学学会第五〇回研究大会の第一日開催は、正しくは二〇一一年一〇月二九日(土)である。ここに訂正する。

## 少年少女世界の名作文学 巻数順

20120712

巻	発行年月日	配本回数	内 容	解 説	読書のでびき
1	1965.11.20	15	古典編 1 アラビアン＝ナイト、ワイナモイネン物語、ギリシア神話、ホメロス物語	神津春繁	滑川道夫
2	1967.6.20	34	古典編 2 聖書物語、イソップ寓話、ニーベルンゲンの歌、ローランの歌、きつね物語、中世騎士物語	上笙一郎	関 英雄
3	1967.5.20	33	イギリス編 1 ガリバー旅行記、ウェスト＝ポリー探検記、トム＝ジョーンズ物語、マザークース、ロビンソン＝クルーソー	白川 握	滑川道夫
4	1966.11.20	27	イギリス編 2 シェークスピア物語、黄金の川の王さま、トム＝ブラウンの学校生活、ばらと指輪、クリスマス＝カロールほか	白木 茂	滑川道夫
5	1968.5.20	45	イギリス編 3 名犬クルーソー、水の子トム、ジェイン＝エア、ワーズワース詩、サイラス＝マーナー、ボンベイ最後の日	酒井朝彦	滑川道夫
6	1965.3.20	7	イギリス編 4 ロビン＝フッドの冒険、フランダーズの犬、ふしぎの国のアリス、黒馬物語	本多顕彰	滑川道夫
7	1965.9.20	13	イギリス編 5 宝島、ジキル博士とハイド氏、幸福な王子、キップリング短編、ジャングル＝ブック	荒 正人	滑川道夫
8	1966.4.20	20	イギリス編 6 ソロモンの洞窟、ボートの三人男、シャーロック＝ホームズの冒険、失われた世界	田中西二郎	関 英雄
9	1967.12.20	40	イギリス編 7 ピーター＝パン、ラブラタの博物学者、人形の家、やみをぬう男、イノック＝アーデン、透明人間	山主敏子	関 英雄
10	1966.7.20	23	アメリカ編 1 リップ＝バン＝ウインクル、白鯨、ホーソン短編集、アンクル＝トムの小屋	白木 茂	滑川道夫
11	1965.1.20	5	アメリカ編 2 若草物語、快傑ゾロ、こがね虫／ぬすまれた手紙	松本恵子	滑川道夫
12	1965.6.20	10	アメリカ編 3 トム＝ソーヤーの冒険、王子とこじき、はねがえる、リーマスおじさん	谷崎精二	関 英雄
13	1966.1.20	17	アメリカ編 4 オズの魔法使い、少女バレーナ、モヒカン族の最後、ホイットマン詩、ケティ物語	本多顕彰	滑川道夫
14	1964.9.20	1	アメリカ編 5 小公子、小公女、秘密の花園、ワンダーブック	村岡花子	滑川道夫
15	1966.12.20	28	アメリカ編 6 赤毛のアン、動物記、オー＝ヘンリー短編集、銀のスケートぐつ	山主敏子	関 英雄
16	1967.2.20	30	アメリカ編 7 あしながおじさん、あの山越えて、白いきば、荒野の呼び声	西川正身	関 英雄
17	1967.7.20	35	アメリカ編 8 ターザン物語、子じか物語、ハート短編集、スカラムーシェ	白木 茂	滑川道夫
18	1968.8.20	48	アメリカ編 9 ベン＝ハー、怪物、わんぱく少年物語、アメリカ文学短編集、ドリトル先生航海記	白木 茂	関 英雄
19	1968.1.20	41	フランス編 1 ガルガンチュエア物語、美女と野獣、ラ＝フォンテーヌ寓話集、マテオ＝ファルコーネ、愛の妖精ほか	梅田晴夫	滑川道夫
20	1964.11.20	3	フランス編 2 三銃士、ああ無情、ペロ＝童話	河盛好蔵	滑川道夫
21	1966.2.20	18	フランス編 3 巖窟王、学問のあるろばの話、いなか医者、モーパッサン短編、リラダン短編、風車小屋だよりほか	佐藤正彰	関 英雄
22	1964.12.20	4	フランス編 4 家なき子、家なき娘、ボードレール詩、昆虫記、ルコック探偵	山内義雄	森久保仙太郎
23	1965.7.20	11	フランス編 5 十五少年漂流記、八十日間世界一周、海底二万里、フィリップ短編、ポールとビルジニイ	石川 湧	滑川道夫
24	1966.9.20	25	フランス編 6 奇巖城、博物誌、にんじん、バルレーヌ詩、青い鳥、狭き門	新庄嘉章	滑川道夫
25	1967.8.20	36	フランス編 7 ライオンのめがね、ばらいろ鳥、海の義賊、ジャン＝クリストフほか	宮崎嶺雄	関 英雄
26	1968.10.20	50	フランス編 8 デブの国 ノッポの国、モリエール短編集、少年少女、黄色のへや、シラノ＝ド＝ベルジュラック	石川 湧	関 英雄
27	1965.4.20	8	ドイツ編 1 ほら男爵の冒険、ウィリアム＝テル、グリム童話、君よ知るや南の国、くるみ割り人形	高橋健二	関 英雄
28	1968.3.20	43	ドイツ編 2 隊商、水晶、影をなくした男、たのしき放浪児、ファルーン鉱山、ゴッケル物語、愛の一家ほか	相良守峯	滑川道夫
29	1966.8.20	24	ドイツ編 3 アルプスの少女、沈鐘、人形使いのポーレ、みずうみ、メーリケ詩、フラウ＝ゾルゲ	手塚富雄	関 英雄
30	1967.9.20	37	ドイツ編 4 悪童物語、アルト＝ハイデルベルク、レアンダー童話集、ファウスト、クオ＝パデイス	高橋義孝	森久保仙太郎
31	1966.3.20	19	ドイツ編 5 みつばちマーヤの冒険、ウィーンの老音楽師、車輪の下、兄と妹、メトロポリス	国松孝二	滑川道夫
32	1965.12.20	16	ドイツ編 6 バンビ、めくらのジェロニモ、チャベック短編、飛ぶ教室、点子ちゃんアントン	植田敏郎	関 英雄
33	1965.5.20	9	ソビエト編 1 隊長プーリバ、外とう、せむしの小馬、ルスランとリュドミラ、スペードの女王、孤児ネリほか	原 卓也	滑川道夫
34	1968.9.20	49	ソビエト編 2 コーカサスのとりこ、トルストイ民話、カチューシャ物語、狐人日記、アフナー＝シェフ童話集、罪と罰ほか	米川和夫	森久保仙太郎
35	1968.2.20	42	ソビエト編 3 金どけい、ゴリキー短編集、父と子、チェーホフ短編集、チムールとその隊員、信号、少女ベアラ	袋 一平	関 英雄
36	1966.6.20	22	ソビエト編 4 偉大なる王、十二月物語、白いむく犬、エセーニン詩、若き親衛隊	和久利誓一	関 英雄
37	1967.3.20	31	ソビエト編 5 ビーチャの学校生活、サーカスのゴムまり小僧、ネズナイカ、石の花、町からきた少女	福井研介	滑川道夫
38	1964.10.20	2	北欧編 1 アンデルセン童話、絵のない絵本、即興詩人、日なたが丘の少女、パール＝ギュント	矢崎源九郎	関 英雄
39	1967.11.20	39	北欧編 2 ニルスのふしぎな旅、七人兄弟、ストリンドベリ童話集、トペリウス童話集、北欧神話、バイキング物語	山室 静	森久保仙太郎
40	1965.2.20	6	南欧編 1 ピノッキオ、ドン＝キホーテ、クオレ	杉浦明平	柳内達雄
41	1968.7.20	47	南欧編 2 チョンドリーノ、デカメロン、ベッケル短編、銀の島	岩崎純孝	滑川道夫
42	1967.4.20	32	東洋編 1 三国志、ルバイヤート、大勇士ルスタム物語、韓国短編集、ジャータカ物語、シャクンタラー	(4人)	関 英雄
43	1967.10.20	38	東洋編 2 水滸傳、故事成語・笑話集、中国現代短編集、神仙譚、中国詩選、剪燈新話、聊齋志異	奥野信太郎	関 英雄
44	1965.8.20	12	東洋編 3 西遊記、古典短編集、宝のひょうたん、現代短編集	后藤有一	森久保仙太郎
45	1966.5.20	21	日本編 1 古事記、風土記／日本霊異記、竹取物語、今昔物語／宇治拾遺物語／十訓抄ほか、お伽草子、平家物語	高崎正秀	滑川道夫
46	1965.10.20	14	日本編 2 太閤記、謡曲狂言物語、太平記、醒睡笑、椿説弓張月	福田清人	関 英雄
47	1966.10.20	26	日本編 3 義経記、西鶴名作集、日本芝居物語、徒然草、方丈記、しみのすみか、雨月物語、東海道中膝栗毛	富田常雄	関 英雄
48	1967.1.20	29	日本編 4 坊ちゃん、きのこ大夫、少年科学探偵、いたずら小僧日記、海底軍艦ほか(短編多数)	滑川道夫	森久保仙太郎
49	1968.6.20	46	日本編 5 次郎物語(第一部)、路傍の石	福田清人	滑川道夫
50	1968.4.20	44	世界民話伝説集 ヨーロッパ編、エジプト・アフリカ編、アメリカ編、アジア編(含・日本)	関 敬吾	関 英雄